

2001年ブッカー賞

—文学産業と小説の質について—

武藤哲郎

はじめに

この論文は2001年4月から2002年3月までロンドン大学 University College London において academic visitor として研修中に執筆したものである。「ブッカー賞」は1969年に始まって今年で33年目となる。今回エントリーした作品の総数は119タイトル（うち出版社が提出したのが102タイトル、審査員がコールインしたのが17タイトル）であった。日程に関しては、今年2月15日審査員公表、8月15日ロングリスト (longlist) 発表、9月18日ショートリスト (shortlist) 発表、そして10月17日にロンドン Guildhall にてBBC 2 テレビ生中継のもと2001年度ブッカー賞の授賞式が行われた。

「ブッカー賞」を受賞することは作家が想像する以上の名声と富をもたらす。Roddy Doyle の *Paddy Clark Ha Ha Ha* (1993) は受賞のあった翌朝書店が開いて30分以内にハードカバーで27,000冊売れる最高速売を記録しているし、映画化された *The English Patient* (1992) は今までに5000,000冊以上売れている。ブッカー賞は「文学 (literature)」というお墨付きを与えるばかりでなく、莫大な利益を作者ならびに出版社そして関連企業にもたらす文学産業なのである。Graham Swift (1996年度受賞) が「ブッカー賞は、本当に正直なところ、喉から手が出るほど欲しい賞であった」と語っているのも頷ける。

しかし、利益がからむあまりに疑念が生じているのも確かである。極端な例では、1996年審査員の Al Kennedy はブッカー賞を「不正のごみため」と称し、自分は300冊も読んでいるのに他の審査員はまるで読んでいなかったと審査のあり方に不満を表している。事実、texts (小説) の他に賞の行方を左右する subtexts (London Literary Community) の存在を指摘する向きもある。¹「売れ筋」ばかりを受賞させて小説の質が落ちていると批判する批評家もいる。文学産業は果たして小説の質を落とすものだろうか。ブッカー賞のシステムを取材していくなかで英国国民性の 'fair' なところを垣間見ることができた。

この小論を書く上でいろいろな方にお世話になった。今年審査員の一人である、作家で批評家のフィリップ・ヘンシャー氏 (Philip Hensher) には小説執筆中にもかかわらず私のEメールの質問に迅速に答えていただいた。さらに、ブッカー賞執行者 (administrator) マーティン・ゴフ氏 (Martyn Goff) には授賞式が間近で多忙な折にもかかわらず何度も私に会っていただき貴重な資料を提供していただいた。そしてUCLの教授で1999年審査員のジョン・サザランド教授 (Prof. John Sutherland) にはこれらの方々を紹介していただいたばかりでなく示唆に富む講義を拝聴させていただいた。これらの方々には深く感謝いたします。最後に、一年間の海外研修を可能にしてくださ

た大妻女子大学の教職員のみなさまにも、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

(1) ブッカー賞の歴史

ブッカー賞は「ブッカー株式会社 (Booker plc.)」から名前をとったことは周知の事実である。現在180の支社を持つ年商35億ポンドのイギリス最大手の食品卸売会社である。その歴史は古く、約200年前にブッカー兄弟により西インド諸島との貿易を目的としてリバプールに設立された。1834年南米ガイアナ (Guyana) に本拠地を置いて砂糖きび栽培を手がけて発展し、1964年ガイアナ独立にともない本拠地をロンドンに移している。

「ブッカー賞はジェームズ・ボンズから始まった」という神話があるが、これはブッカー株式会社常務取締役 Jock Campbell が旧友 Ian Fleming への巨大な課税の抜け穴として自社内に小さな出版局 Authors' Division を設立して「ジェームズ・ボンズ」の著作権を買い上げたからである。その後 Agatha Christie, Harold Pinter などの著作権も手に入れ、彼が想像していた以上の収益をもたらす結果となった。ブッカー賞の財政的基盤を作ったのが彼であるとすれば、賞自体のアイデアを思いついたのはトム・マスケラー (Tom Maschler) である。1951年、フランスの文学賞 (Prix Goncourt) 発表当夜彼はパリにいた。18歳の若さで体験したフランス人の知的情熱はイギリスに帰って出版社 Jonathan Cape に勤めてからも脳裏から離れなかった。

私の目標はイギリス人の純文学小説への関心を高めることでした。毎年ショートリストを発表することで競争（そして勝ち残り）の雰囲気を作りたかったのです。もう一つ気にかけてのは秘密に関してです。受賞者を夕食会まで秘密にしておくことは人々を気がかりな状態にさせ、結果的にメディアの関心を高めるので重要な要素でした。²

彼はブッカー株式会社の重役たちの前でそのアイデアを披露し、いつの日かその投資を誇りに思う日が来ると説いた。30年以上たった現在、彼らが想像した以上の誇りをブッカー株式会社は得る結果となったのである。

しかし、ブッカー株式会社は昨年スーパーマーケット関連の巨大企業アイスランド・グループ (Iceland Group) に買収されて名前を Booker Cash & Carry Ltd. に改めている。さらに、アイスランド・グループは来年2002年にはブッカー賞の運営経費300,000ポンドを共に負担するスポンサーを求めることを公表して、ブッカー賞を取り巻く経営環境は風雲急を告げている観がある。一方、マーティン・ゴフ氏は現在 the Booker Prize Foundation 設立に乗り出し、上記のスポンサーあるいはアイスランド・グループに取って代って経費を全て負担する新しいスポンサーを探しているところである。ゴフ氏は私とのインタビューで「ブッカー賞」の名前は守ること（「アイスランド賞」にするという提案は冷笑にふされたらしい）、賞の選考ならびに審査のシステムは変えないことを力強く確約していた。

(2) ブッカー賞のルール

ブッカー賞のルールは、ゴフ氏から直接「2001年度ブッカー賞—ルールとエントリー用紙」をいただいたので、それを必要な箇所だけ日本語訳してみた。

1. 賞

(171)

- a) 賞金は20,000ポンド。審査員の意見により、十分な長さで適格かつ最良の小説の作者に与えられる。賞を分けたり、保留にはできない。
- b) 審査員は提出された作品の中から6冊のショートリストを選ぶ責任がある。ショートリストに選ばれるためには少なくとも一人の審査員のブッカー賞として適格だという強い支持がなくてはならない。ショートリストに上った作家には各々1,000ポンドと皮装丁された各自の本が与えられる。
- c) 審査委員団は、ブッカー株式会社によって任命されたブッカー賞運営委員会によって選ばれる。賞の事務処理は Book Trust によって行われる。

3. 適格な作品

- a) 英国連邦およびアイルランド共和国の市民によって書かれた十分な長さの小説は適格と見なされる。統一の取れた実質的な作品であること。短編・中編小説は適格ではない。作品の申し込みはルール4に従って取り扱われる。
- b) 作者が出版日に死亡している場合は考慮されない。
- c) もともと他言語で書かれ英語に翻訳された作品、自費出版の作品は適格ではない。
- e) 作品が適格かどうかの最終判断は審査員が決定するものとする。
- f) 以前にブッカー賞、あるいは他の賞を受賞した作品でもエントリー可能である。³

「受賞の条件」2a), b), c), さらに3d), そして「作品のエントリー」4a)~f)は割愛した。1a)の賞金は21,000ポンドに変更されている。「作品のエントリー」の内容は、出版期日を2000年10月1日から2001年9月30日までに限り、エントリーの機会を実質年2回に設定していること、さらに「コールイン (call in) 制度」(出版社が提出した作品以外に審査員自身が呼び入れることができる制度)を設けていることである。

(3) ブッカー賞の運営と審査

ブッカー賞の運営は現在次の3つの団体によって行われている。諸般の事務処理を行うのが Book Trust (読書を推進する慈善団体)であり、現在その副理事がマーティン・ゴフ氏である。賞金、授賞式その他運営にかかる費用の財政的援助をしているのがアイスランド・グループである。そして実際に賞の中心的運営を担っているのがブッカー賞運営委員会 (The Booker Prize Management Committee) である。運営委員会の具体的な仕事は、毎年審査員 (judges) と審査員長 (chairman) を選ぶこと、必要とあれば賞のルールを改訂することである。この運営委員会のメンバーは現在、委員長 (Jonathan Taylor), 執行者 (Martyn Goff), ジャーナリスト (John Coldstream), 作家 (Harriet Harvey-Wood), 書店 (James Heneage), 出版社 (Caroline Michel, Peter Straus, Ion Trewin), アイスランド・グループ (David Price), 代理人 (Deborah Rogers) そして図書館員 (Prof. Bob Usherwood) の計11名から成っている。⁴しかし、今回のインタビューで分かったことはブッカー賞の具体的な運営は全てマーティン・ゴフ氏を中心に動いていることである。費用の面でアイスランド・グループの役員と掛け合ったり、審査員団を選んだり審査員会にオブザーバーとして参加したり、直接ショートリスト作家と連絡を取り合うのも、そしてジャーナリズムに情報を提供するのも全てゴフ氏を中心となっている。これは一つには30年近くブッカー賞執行者を務め上げているので各界への知名度からすると彼をおいては他にいないからであり、もう一つはマスクラーが指摘した「秘密の重要性」からすると実際に動く人間を一人にしておいたほうが情報のリークが少ないからであろう。

審査員は、批評家、大学教員、編集者、小説家そして著名人から1名ずつ、全部で5名毎年運営委員会によって選ばれる。審査員の「和」を考えてからか、審査員長を先に選び、その後で審査員の人選に入るのが恒例になっている。今年の顔ぶれは、*Kitchen Venom* (1996) でサマセット・モーム賞を受賞し、現在第一次アフガン戦争を描いた小説 *The Mulberry Empire* を執筆中のフィリップ・ヘンシャー氏。スターリング大学で英文学を教えているRory Watson教授。『デイリー・テレグラフ紙』(*The Daily Telegraph*) のKate Summerscale。 *Daughters of the House* (1992) でブッカー賞ショートリストに上ったことのあるMichèle Roberts。そして、元保守党内務大臣で現在上院議員のベイカー卿 (Lord Kenneth Baker) が審査員長となった。

ヘンシャー氏によれば、今年の審査員会は全部で4回あった。最初の会では明らかに出来の悪いと思われる作品を取り除く作業が行われ、二回目はロングリスト、三回目はショートリスト、そして最後は受賞作発表前に行われた。どの会もそれほどもめることはなく一時間以内で終わったそうである。会議の内容は授賞式までいっさい秘密であり、記録も取らないことになっている。ベイカー卿のスピーチからすると、今年の審査員はロングリストを初めて公表するなど情報のリークや「買収」にはかなり気を使ったようである。シャンペン、葉巻、ラップ・ダンサーなどの誘惑をしりぞけ、「茶色の封筒」も届かなかったようである。さらに、素人が考えても毎年120冊もの本を短期間(約5ヶ月)で読むのは審査員にとって大変な作業と思われる。ヘンシャー氏は自ら認める速読家で、一時間に100~120ページは読むので、一日に2~3冊読むのは別に不可能ではないと答えていた。

(4) 2001年ロングリスト

8月15日にロングリストが発表された。タイトルは、Beryl Bainbridge: *According to Queeney*, Derek Beaven: *If the Invader Comes*, Melvyn Bragg: *A Son of War*, Peter Carey: *True History of the Kelly Gang*, Ciaran Carson: *Shamrock Tea*, Stevie Davies: *The Element of Water*, Nadine Gordimer: *The Pickup*, Patricia Grace: *Dogside Story*, Abdulrazak Gurnah: *By the Sea*, Nick Hornby: *How to be Good*, Zvi Jagendorf: *Wolfy and the Strudelbakers*, James Kelman: *Translated Accounts*, Ian McEwan: *Atonement*, Eoin McNamee: *The Blue Tango*, Andrew Miller: *Oxygen*, David Mitchell: *number9dream*, Ferdinand Mount: *Fairness*, V. S. Naipaul: *Half a Life*, Philip Pullman: *The Amber Spyglass*, Rachel Seiffert: *The Dark Room*, Ali Smith: *Hotel World*, Manil Suri: *The Death of Vishnu*, Jane Urquhart: *The Stone Carvers*, Marina Warner: *The Leto Bundle* の24作品であった。

ロングリストの発表は今年初めての試みである。作品のエントリーからショートリストの発表までかなりの期間(約5ヶ月)があるので、その間に行われる情報のリークやもろもろの圧力に対処するために早めに公表することで疑惑を一掃しようとしたためと思われる。ロングリストへの反響は大きく分けて3つあった。一つはSalman Rushdieの *Fury* の落選。二つ目は児童文学者プルマンの *The Amber Spyglass* が含まれていること。そして最後に5回ショートリストに上りながら一度もブッカー賞を取っていないベインブリッジの指名である。彼女は今回ジョンソン博士の晩年をテーマにしている。第三者の目を通して描かれる彼の姿は無気味であり迫力があるし、多くの努力を払って調査した形跡がある。TLS (*The Times Literary Supplement*) は、「*According to Queeney* において彼女は、それによって他の全ての歴史小説が判断されるべき一つの基準を提出したのである」⁵と評している。付け加えると、ピーター・ケアリー、ニック・ホーンビー、ナディン

・ゴードイマーそしてV.S.ナイポールら重鎮の名前もロングリストにあるのは見逃せないであろう。私設馬券屋ウィリアム・ヒル (William Hill) が出した8月15日付けのoddsはベインブリッジが6/1, メルビン・ブラッグ (Malvyn Bragg) が7/1, ニック・ホーンビー (Nick Hornby) が10/1であった。スポークスマンのグラハム・シャープ (Graham Sharpe) は「彼女の受賞を今回拒否するためには審査員は長く真剣に考えなければならないだろう」とコメントしていた。一番人気の *According to Queeney* は9月3日早々に Waterstone's の Book of the Month に指定され定価 (ハードカバーで16.99ポンド) の3ポンド引きで大々的に売られ始め、報道機関の多くはベインブリッジ受賞に大きく傾いていた。

(5) 2001年ショートリスト

9月18日に発表されたショートリストの6作家は、Peter Carey, Ian McEwan, Andrew Miller, David Mitchell, Rachel Seiffert, Ali Smithであった。9月19日付の各紙がこぞって取り上げた話題はベインブリッジの落選である。『ガーディアン紙 (*The Guardian*)』は「ブッカーの永遠の花嫁ベリル・ベインブリッジは、昨夜6度目にわたって無視された。彼女の小説はイギリスで最も大きな文学賞の最後から2番目のハードルを越えることが出来なかった」と述べ、審査員の誰も彼女がショートリストに残るのを強く主張しなかったことを伝えている。「大衆はベインブリッジを望んでいるのに」という記者の執拗な質問に、審査員のヘンシャー氏は「それでは大衆の感傷によって賞は決定されるのですか？これは文学賞ですよ」と言葉を強くしていた。彼は後に私の質問に次のように答えていた。

ベインブリッジに関して言えることは、これだけ粒がそろった年なので彼女の小説よりも印象的な小説が多かったということだけです。もう一つ、私の重荷になったのは彼女が受賞すべきと報道機関が決めてしまったことでした。我々審査員の誰もが彼女を最終的な受賞者と考えていなかったのだから、ベリル失敗の報道に新聞記事が埋まってしまって最終受賞者の宣伝が出来なくなってしまうことでした。これは誰にとっても不公平なことです。私は彼女の作品が好きですし賞賛もしています。しかし、彼女を支持する多くの人はいわゆる最終的に好む小説を読んでいないのは明らかなのです。ですから、彼らの言うことに注意を払うのは無意味なことでした。

しかし、二番目に有力視されていたブラッグの *A Son of War*, ホーンビーの *How to be Good* も落選し、重鎮たちケルマン、ナイポール、ゴードイマーらも全滅に近いし、話題になったブルマンの *The Amber Spyglass* もショートリストに生き残れなかった。報道機関の予想をあざ笑うかのような審査員の発表であった。

書店のWillie Andersonは「ブッカー賞の美しさは、その予想できないところにある。どの二年も同じではない、それはどの二年も審査員が同じではないからである。ブッカー賞はたいていの小説と同じで、全く個人の好みによって選ばれる」と述べている。⁶1998年度の審査員Nigella Lawsonは「私は最初から、新聞記事とか批評を読まないように決めていた。私はMagnus Millsがバスの運転手であることを知らなかったし、他の審査員もそうだと思う」と述べている。⁷つまり、一旦審査員団が選ばれると彼らは一つの独立国家となる。受賞作を発表するまで、彼らはブッカー株式会社 (アイランド・グループ)、さらに出版社や書店そして報道機関から一切の干渉を受けず自らの判断で動くのである。

簡単にショートリストの作家と作品を紹介してみる。イーアン・マキューアンは53歳でイギリス生まれ、オックスフォード在住。1998年 *Amsterdam* でブッカー賞受賞。*Atonement* は第二次大戦をはさみ少女の「嘘」がもたらした悲劇を償う物語。アリ・スミスは39歳でInverness生まれ、ケインブリッジ在住。*Hotel World* は彼女の二作目の小説で5人の女性がホテルで会い、そのうちの一人が階段から落ちて「幽霊」となってから物語が始まる。ピーター・ケアリーは58歳でオーストラリア生まれ、ニューヨーク在住。1988年 *Oscar and Lucinda* でブッカー賞受賞。*True History of the Kelly Gang* はオーストラリアの初期移住民 Ned Kelly の一生を描いたもの。デイビッド・ミッチェルは32歳で Lancashire 生まれ、日本の広島に在住。*number9dream* は彼の二作目の小説で、20歳の日本人青年が東京でまだ会ったことのない父親を探す物語。レイチェル・セイファートは30歳でオックスフォード生まれ、ベルリン在住。*The Dark Room* は彼女のデビュー作で、ドイツ人青年の目を通して両親がナチズムのもとに犯した罪を検証するもの。アンドリュー・ミラーは41歳で、Bristol 生まれでロンドン在住。*Oxygen* は彼の3作目の小説で、4人の登場人物が最終的に勇気を取り戻して試練に立ち向かう話である。

(6) 2001年ブッカー賞

BBC2 は授賞式に先立つ10月6日に 'People's Booker' と題して一時間番組の特集を組んで6人の著名な批評家にショートリスト6作品を解説させた。視聴者にも「あなたが決めるブッカー賞」と銘打ってアンケートを取って10月16日に集計したところ、マキューアンがトップで選ばれている。本の売上もケアリーよりもはるかに多く Waterstone's ではベストセラーのナンバー・ワンであった。ウィリアム・ヒルのシャープ氏も、ケアリー6/4、マキューアン15/8のオッズにもかかわらず、授賞式前のインタビューではマキューアンが賞を取るのではないかと不安になっていた。批評家たちもどちらかというマキューアンに傾いた観があり、たとえば9月18日付 *TLS* ('A version of events' by Robert Macfarlane)、10月4日付 *London Review* ('Point of View' by Frank Kermale) などマキューアンのほうを取り上げていた。

さて10月17日ロンドン郊外の Guildhall で2001年度ブッカー賞の授賞式が行われた。結果はケアリーであった。審査員長ベイカー卿によれば、「やはり小説の本質はストーリー・テリング」であり、この点でケアリーとマキューアンが他のショートリスト作品より秀でていたらしい。この二つの作品を中心に授賞式前の最後の審査員会が行われた。ケアリーが選ばれた理由を10月18日付『タイムズ紙 (*The Times*)』は「ケアリーの作品のほうがより洗練されている ('more polished')、『ガーディアン紙』は「マキューアンの作品には欠点があった ('they saw flaws in McEwan's writing') と説明している。具体的にどんなところが欠点であったのだろうか。BBC2 'People's Booker' で批評家たちは「ロビー (Robbie) は物語の最初ではおどおどした青年に描かれていたが、物語の後半 (ダンケルクへの撤退) ではまるで戦争の英雄 ('war hero') のように描かれていてその変化が妙であり、さらに物語最後のブライオニー (Briony) もけばけばしいお婆さんになってちっとも 'atonement' になっていない」と述べていた。欠点を考えればなるほどそういう指摘も正しいのかもしれないが、どうも納得がいかない。苦難を経験すれば人間も変わるであろうし、60年以上も経って作家として成功していれば身なり趣味がぜいたくになっても当たり前で、それと罪の「償い」とは無関係に思える。ケアリーの作品にしても、実在するネッド・ケリーの手紙をもとに悪者と評価されていた伝説的人物の一生に新しい光を与え、出来事だけを語るコンマのない文章はまるで Defoe のように緻密ではあるが、どうも物語としてはマキューアンの方が面白いの

である。そう考えるのは私だけかと思いつつながらサザランド教授に相談してみると、予想に反して彼もマキューアンが賞を取るものと考えていた。「三年前に *Amsterdam* で受賞していることがかなりのハンディになっている」と言って、直接審査員のヘンシャー氏とコンタクトを取るよう指示してくださった。

私がブッカー賞を取材するうちに一番疑問に思い始めたのは審査基準についてである。毎年申し送られる審査基準があるかどうかマーティン・ゴフ氏に確認したが、それはないそうである。毎年変わる審査員は、‘the best novel’ というのはなほだ「漠とした」基準によって選考しなければならない。ゴフ氏は以下のように述べている。

審査員の一番大きな問題は、‘the best novel of the year’ の定義である。それは大変に融通性があり、それぞれの審査員団は違った解釈を下すであろう。勿論、それだけがブッカー賞の狙いではない。ブッカー株式会社は才能のある作品に報い、その作家の名声を人々の間に高めて、本の売上を伸ばしたいと考えている。⁸

つまり、これもかつて審査員を務めたサザランド教授と話したことであるが、もし今回の審査員団が全く違った顔ぶれであればマキューアンを選んだ可能性があるわけである。根本的なところに戻って考えてみると、果たしてAという小説とBという小説を比べてAという小説が優れていると判断できるのであろうか。「個人の好み」という言葉は適切でないにしても、「個人の価値基準」は違うし、違って正常である。イギリス人はどうもその違いを尊重してきたように思う。毎年審査員を変えるのも、一定の基準を設けないのもこの違いを尊重するからである。これを数十年の間毎年続けていけば、一定の基準を設けて毎年同じ審査員で選考するのと同じほど、あるいはそれ以上に民主的な選考となるのである。一見偏った選考に見えるけれども、長い年月が経って振りかえってみれば、なべて ‘fair’ になっているというイギリス人の賢い国民性を垣間見たような気がする。さて、マキューアンとケアリーの問題であるが、はたでとやかく想像しても始まらないので今年審査員のヘンシャー氏に直接聞いてみた。「マキューアンよりもケアリーの方が将来よく読まれると判断したのですか」という問いに、

勿論、小説の将来は誰にも予測が付きません。私はケアリーを選びました。というのは、マキューアンが何をこれから書くのか完全に予測が付きませんでしたし、後を読んでみても何ら前読んだことに加わるものがなかったからです。ケアリーは私の心の中で大きく膨らんでいきました。作品の根本をまだ理解していませんが、私の賞賛は揺ぎないものです。マキューアンに反対したのは、結局、その小説を人に教えるのは簡単だからです。玄人ではあるが、どういうわけか小さいのです。

と答えていただいた。

(7) 文学産業と小説の質

ブッカー賞はルール 3 a)にあるように英国連邦ならびにアイルランド共和国の市民からその候補を募っている。具体的には、イギリス、アイルランド、インド、パキスタン、バングラディシュ、オーストラリア、ニュージーランド、南太平洋諸国、カナダ、カリブ海諸国、南アフリカの国々ま

で広く及ぶ。これは驚くべきことに世界人口の実に4分の1にまで達する。⁹まさに巨大なマーケットをブッカー賞は視野に据えているのである。1981年ラッシュディ、1982年 Thomas Keneally の受賞を皮切りに、1980年代から1990年代のショートリストの約半分を非英国人が占めていた。これはブッカー賞がポスト・コロニアル作家を優遇してきた歴史でもあり、見方を変えれば「かつて大英帝国は植民地を用いて自国の資本にしたが、現在はロンドンのブッカー賞が英国連邦を用いて文学産業を栄えさせている」¹⁰のである。加えて、9月のショートリストの発表、10月の最終発表は、日本で言う「読書の秋」ではないが、イギリスで最も本が売れる9月から12月までの時期に重ねてあるのは偶然ではない。¹¹さらに、ショートリストと受賞作発表との時間差はサスペンスを生み出して商品価値を最高に高めている。つまるところ、本の売上を伸ばそうとする体制は完璧に整っているのである。

しかし、文学産業が本を売る努力をし始めたのはかなり最近になってからで、ブッカー賞が人々に定着し始めた時期と重なる。1960年代までイギリス人は本を買わずに図書館を利用する国民であった。劇作家は別にして、小説家は小説を書くことによって生計を立てるのは不可能であった。Woolf も Joyce も当時本の売上は少なかった。個人的資産があったからこそ彼らは小説を書くことに専念できたのである。国も小説家を援助する法案を作ったがそれも不十分であった。¹²イギリス人が本を買うようになったのは、ブッカー賞が軌道に乗り文学産業が発展して来たつい最近のことである。1989年から1993年までの調査では、ビデオあるいはコンピューター・ゲームの普及にもかかわらず本の売上は確実に伸びている。1993年の調査で1,792人にアンケートをとったところ、その内の実に56パーセントの人たちが一年間に16冊以上の小説を買ったそうである。¹³

しかし、逆に今日あまりにも多くの小説が巷にあふれるようになった。Waterstone'sなどの書店に入ると必ず「ベスト・セラー」あるいは「ニュー・ブック」の棚があってその中身は毎週めまぐるしく変わる。読者は当然どの本を読んでいいのか途方にくれる。ブッカー株式会社とブッカー賞の会長を長年務めた Sir Michael Cain は毎年審査員に「ブッカー賞はどんな本であってほしいか」と尋ねられ、「それが出版されてから20年たってもAレベルの質を保つ本であってほしい」と答えたそうである。¹⁴毎年審査員はこの意志を継いできたに違いない。今年の審査員ヘンジャー氏は自らの価値観に正直に「the best novel of the year」を選んだのである。時には「売れ筋」を選ばなくてジャーナリズムの批判を買ひ、時には人気小説を選んだばかりに「小説の質は落ちてしまった」と批評家から悪評を浴びせられる。どう転んでも非難を浴びるのが「ブッカー賞」である。それほど有名になったと言った方がいい。審査員は毎年120冊という途方もない数の小説から一それも出版社が一度ふるいにかけてのもので今年出版された小説の総数は8,000冊におよぶ一彼らの全精力を傾けて「最良の小説」を選らんできたのである。ブッカー賞の質が落ちているか否かは一概に判断がつかないし、また性急に結論を出す問題でもないだろう。判断は100年後にどれくらいブッカー賞受賞作がイギリス人に読まれているかで決まる。今回ロングリストに選ばれたメルビン・ブラッグはいみじくも次のように「ブッカー賞」をまとめているので、その言葉によって論文を締めくくりたい。

この国の多くの人は小説を読みたいと思っているし、小説を読むのが好きである。しかし、毎週出版される途方もない数に圧倒されて全体が見えなくなってしまっている。「ブッカー賞」はその中から6冊の決まった本を与えてくれるのである。¹⁵

【注】

1. 'Is the Booker Fixed?', Stephen Moss, *The Guardian*, September 18, 2001.
2. 'how it all began', Tom Maschler, *booker 30*, pp. 15-6.
3. *2001 Booker Prize for Fiction—Rules and Entry Form*.
4. 'History', *The Booker Prize for Fiction 2001*.
5. *TLS*. 'A desparate fragility', Henry Hitchings, September 7, 2001, No. 5136.
6. 'a bookseller's perspective', Willie Anderson, *booker 30*, p. 26.
7. 'Judges', *The Booker Prize for Fiction 2001*.
8. 'Introduction', *Prize Writing*, p. 17.
9. 'The Booker Prize: Eligibility and Nationality', *Consuming Fictions*, p.77.
10. 'Booker versions of the Raj', *The Postcolonial Exotic*, p. 117.
11. 'The Booker Prize: Rules and Mythology', *Consuming Fictions*, p. 72.
12. 1960年代以前の作家の収入に関しては, 'Public Lending Right: A salary for Authors', *Fiction and the Fiction Industry*, pp. 107-29. を参考にした。
13. 'Introduction', *Consuming Fictions*, p. 7.
14. 'the booker story', Sir Michael H. Cane, *booker 30*, p.9.
15. 'booker on the box', Melvyn Bragg, *booker 30*, p. 37.

【参考図書】

- 1) 小説
 1. Bainbridge, Beryl. *According to Queeney*, Little, Brown and Company, 2001.
 2. Bragg, Melvyn. *A Son of War*, Scepter, 2001.
 3. Carey, Peter. *True History of the Kelly Gang*, faber and faber, 2000.
 4. Davies, Atevie. *The Element of Water*, The Women's Press, 2001.
 5. McEwan, Ian. *Atonement*, Jonathan Cape, 2001.
 6. McNamee, Eoin. *The Blue Tango*, faber and faber, 2001.
 7. Miller, Andrew. *Oxygen*, Scepter, 2001.
 8. Mitchell, David. *number9dream*, Scepter, 2001.
 9. Naipaul, V. S. *Half a Life*, Picador, 2001.
 10. Hornby, Nick. *How to be Good*, Viking, 2001.
 11. Pullman, Phlip. *The Amber Spyglass*, David Fickling Books, 2000.
 12. Seiffert, Rachel. *The Dark Room*, William Heinemann, 2001.
 13. Smith, Ali. *Hotel World*, Hamish Hamilton, 2001.
 14. Urquhart, Jane. *The Stone Carvers*, Bloomsbury, 2001.
- 2) 文献
 1. Goff, Martyn. *Prize Writing*, Hodder & Stoughton, 1989.
 2. Huggan, Graham. *The Post-colonial Exotic—Marketing the Margins*, Routledge, 2001.
 3. Sutherland, J. A. *Fiction and the Fiction Industry*, University of London the Athlone Press, 1978.
 4. Todd, Richard. *Consuming Fictions—The Booker Prize and Fiction in Britain Today*, Bloomsbury, 1996.
 5. *booker 30—a celebration of 30 years of the booker prize for fiction 1969–1998*, Booker plc. , 1998.
 6. *2001 Booker Prize for Fiction—Rules and Entry Form*. Book Trust.
- 3) ウェブ・サイト
 1. *BBC2 'Arts'*. www.bbc.co.uk
 2. *The Booker Prize For Fiction 2001*. www.bookerprize.co.uk
 3. *The Guardian*. www.theguardian.co.uk
 4. *The Independent*. www.independent.co.uk
 5. *The Times*. www.thetimes.co.uk